

森蘭丸の一族の子孫 江迎町 鬼突(おにづき)の森邸を訪ねて

佐世保
遺跡
レポート



今回は以前より気になっていた江迎町にある森蘭丸の一族の子孫が住むという家を訪ねた。

北松浦郡佐々町から江迎へと抜ける江里峠を北東へとかなり細く険しい山道を進む、こんなところに民家があるのかと疑うような道だった。しばらく進むと幾分視界が開け民家が見えてきた。どれも敷地が広く古くからの民家ようだ。その途中で、村の境界線を示す辻札が古木の根元に置かれていた、古い習わしであると前に聞いたことがある。辻札を過ぎ少し下ると目的地の森邸に到着した。

紅葉と「おにづきまたたびの里」と書かれた木の看板と犬の鳴き声が出迎えてくれた。ここは、テレビでも紹介され、テレビCMのロケ地としても使われたことのある紅葉の名所として知る人ぞ知る場所であった。

敷地への入口から屋敷までは紅葉の道で、その先に風情のある日本家屋がみえる。築100年以上たつものだが、老朽化が激しく来年には取り壊す予定のようだ。最高のロケーションがひとつ無くなり惜しい気もするが、ご主人と奥様だけで維持していくのは大変なのだろう。屋敷の廻りには樹齢何百年にもなるかという大木がいくつも立っていて歴史を感じさせる。広大な敷地にはマタタビ畑や炭焼き小屋などがあり、学生が体験学習の場として宿泊できる場(民泊)としても提供しているということであった。

とても穏やかな表情のご主人の森基一郎さんが出迎えてくれて、私たちのために、囲炉裏に火をおこし、手入れの行き届いた日本庭園でお茶菓子を頂きながらお話を聞くことができた。



江里峠



辻札

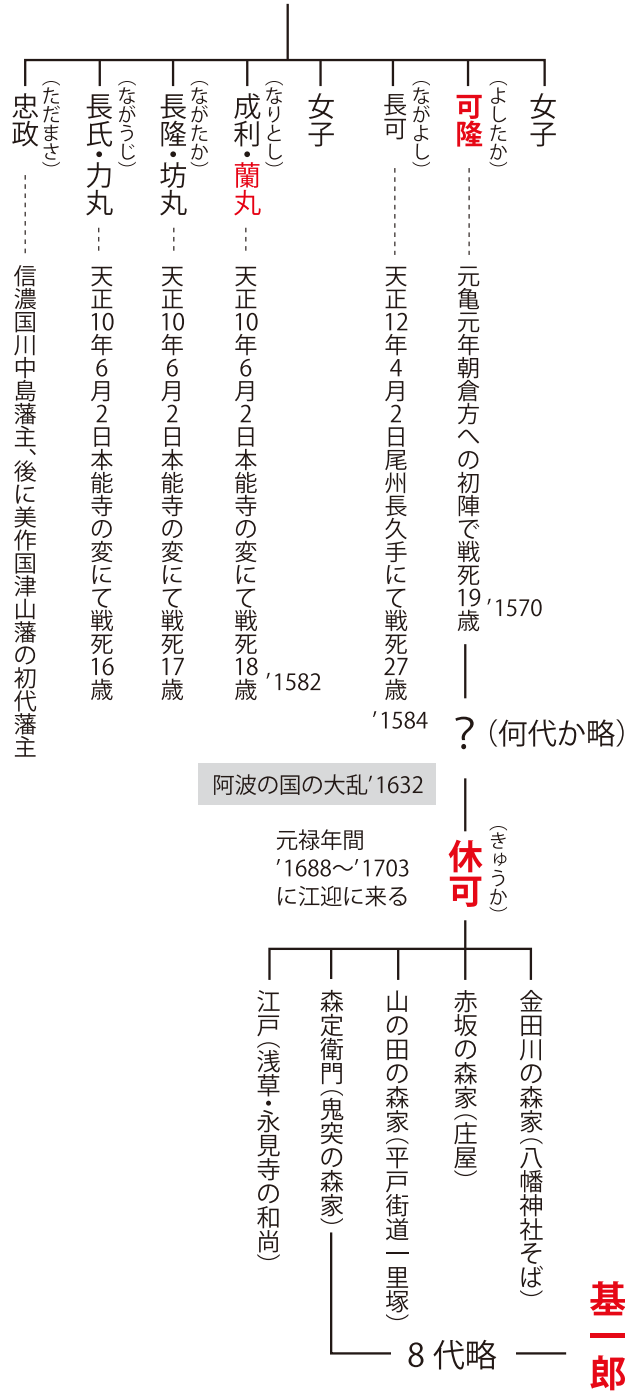


森 基一郎さん



森邸

森可成 よしなり



森家の系統

織田信長の小姓として本能寺の変で討ち死にした事で知られる森蘭丸には兄弟がいた。今回お話を聞かせていただいた森基一郎さんは、森兄弟の長男可隆(よしたか)からの子孫にあたる。

森兄弟の父である森可成(よしなり)は尾張の住人で織田信長の家来となる。知略武功に優れていたのので信長に求愛されていた記録が残されている。1570年、可成は朝倉義景の籠もる筑前の手筒山城を攻めたが、その時長男の可隆も共に出陣した。19歳の初陣だったという。城への一番乗りを果たし、初陣にして手柄を立てたが、若さのためか深追いしすぎて戦死してしまう。同年、父親の可成も戦死したため、わずか13歳の森長可が家督を継ぐことになり、のちに「鬼武蔵」と恐れられる戦国きっての猛将となり信長を支えていく。実はその森兄弟の長男、可隆には息子がいて、名を森伝右衛門休可という。休可は阿波の国(徳島県)に落ち延びたが、阿波の国で内乱が起こり、船で阿波を後にして平戸に辿り着く。その後、江迎へとたどり着いたという。

以上が森基一郎さんに頂いた系図をもとにまとめた話だが、一つ疑問が生じる。それは可隆が戦死した(1570年)と阿波の国の大乱(1632年)と休可が江迎にやって来たとされる元禄年間(1688~1703)の間には100年以上もの間があり、休可が可隆の嫡男であることは考えにくい。おそらく可隆と休可の間に1人もしくは2人の人物がいたと思われる。

休可から以降の森家の系図は比較的にはっきりと分かっている、現在の森基一郎さんは休可の4男(定衛門)から10代目にあたるという。ちなみに系図は基一郎さんの父・幸夫さんの弟のしげよしさんという方が昭和35年5月にまとめたものだったということであった。

鬼突(おにづき)という地名

この地で子孫を増やしていった森一族は、慶応の頃まで藩に仕えることを潔しとせず、ひたすら隠棲生活を送っていたという記録がある。もしかして鬼突(おにづき)という地名も人を寄せつけないための防衛手段として鬼の住む(鬼付き)山里の噂を流した結果、その地名が今に残っているのかも知れない。この地には鬼にまつわる昔話が残されていて、鬼の岩屋(鬼突洞窟)という場所は休可家族が移住してきた際、落ち着くまでの仮の住まいとした場所という話も残っているが今は天井部分が崩落して洞窟は見ることができないとのことであった。

烽火の地

杉の元といわれる地区には休可が初めて江迎の地にやって来た時のエピソードが言い伝えられている。阿波の国の内乱により、船で平戸に辿り着いた休可家族はその後、平戸からふたたび船で江迎川をさかのぼり、赤坂(江迎町赤坂)にたどりつく。家族(妻及び男子4人)を赤坂に残し、休可は定住の地を求め鬼突(おにづき)の山へ向かった。当時の山は獣が潜む大原始林、江迎川の支流、金田川をさかのぼって道無き道を進んでいった。

赤坂をたつに先立ち、家族に向かい「あの山を永住の地としたいが人跡未踏で何が潜むか分からん。住めるようだったら烽火を挙げる、これを見たら住めるものと思つて皆登ってこい。もし烽火が挙がらなかったら、猛獣にかみ殺されたものと思いつて登ってきてはならぬ」と言っておいた。無事に山の中腹まで登り着いた休可は、人の住める所と見定め、烽火を挙げ家族を呼んだ。それ以降この地に永住し、子孫を増やしていった。

現在も休可が挙げた烽火のかまどを見ることができる。その場所は森邸より江迎方面へ少し下った場所にあり、整備されていた。昭和32年には杉の元部落の人の手によって記念碑も建てられた。そこから観る今の景色は木々に視界がさえぎられ麓まで見渡せないが、森さんが幼い頃はもっと広く遠くまで見渡せていたという、休可が来た当時の景色はどうだったのだろう。乱世の時代、遠く尾張の国から阿波の国を経てこの地に流れついた森一族の末裔の休可。この地に永住しようと決意した休可はどれほどの想いでここから烽火を挙げたのだろう。



烽火の地



烽火台の石



烽火の地からの景色

八幡神社

烽火の地の近くに八幡神社(はちまん)がある。

休可が阿波の国から退散しようとして八幡の守護神へお別れに参拝しに行ったとき、社殿の天井から落ちてきた指槌(さしづち)をこの地に持ってきて、ご神体として祀ったのが八幡神社の始まりである。今でもその指槌(さしづち)はご神体として保管してあるという。

八幡神社の下に施設があるがその場所が休可の家族が最初に住んだ館跡地で、休可の長男の子孫の方が今でも管理しているとのことだった。この場所から江迎の森一族は拡まっていったのだろう。まさに森家の原点であり、出発地である。



八幡神社



石碑に刻まれた森一族の名前

休可夫妻の墓

森邸の敷地に休可夫妻の墓地がある。3基の立派な墓石が現在の森家の墓とは離れた場所であり、向かって左が休可の五男で浅草の永見寺の管長となった貫道大和尚の空墓(実際の墓は浅草永見寺)で中央の奥が休可。右手前が休可夫人の墓石である。

休可の墓石には元禄十丁丑年二月十五日(1697年2月15日)の日付が刻まれていた。

元禄十丁丑年
瑞照和上休可禅玄信士
二月十五日



石碑に刻まれた文字



中央の奥が休可。右手前が休可夫人の墓石
左が休可の五男で浅草の永見寺の管長となった貫道大和尚の空墓。

さいごに

最後に森さんの屋敷に保管されているという、森家に伝わる武具をみせて頂いた。写真の右が槍で、刃の部分は戦時中の金属類回収令によりなくなったとのことだった。中央は木棒だろうか、左側は木刀のようだ。そしてなぎなたの柄の部分と思われるものも保管してあった。

これらの武具は、森さんが生まれる以前から、森家に代々伝わってきたもので、鑑定などにだしたことはなく、記録も残されてないため、詳しいことは分からないということであった。もしかしたらこの武具も、八幡神社のご神体である指槌(さしづち)と同様に森休可家族がこの地へやって来た際に、所持していたものなのかもしれない。

突然の訪問にもかかわらず暖かいおもてなしをしていただき、烽火の地やお墓への案内までしていただいた森基一郎さんと奥様には本当に感謝いたします。



森家に伝わる武具(槍・木刀など)



森家に伝わる長刀



武者くぐり

侍が寝込みを襲われても大丈夫なように工夫されている。